

研究会事務局

山口研究室

☎

目 次

【論稿】

フンボルト大学図書館学科 Dr, Greguletz 氏のインタビュー

.....河井 弘志

【報告】

第10回図書館史を考えるセミナーについて

【事務局通信】

会員制度の改正と会費値上げのお願い

第11回図書館史を考えるセミナー（予告）

フンボルト大学図書館学科 Dr, Greguletz 氏のインタビュー

河井 弘志（立教大学）

4月はじめにベルリンに来て、すでに4カ月を経過した。当初は国立ベルリン図書館（Staatsbibliothek zu Berlin）で18世紀以降のドイツ図書館学の文献でのコピーに専念したが、6月中旬からドイツ図書館研究所（Deutsches Bibliotheksinstitut=国立）の外国課（Bibliothekarische Auslandsstelle）のジーモンさん（Fr. Elizabeth Simon）の尽力により、激動のベルリンの図書館と図書館学教育機関を見学することができた。

スケジュールの中には、私の所属する立教大学と姉妹校の関係にあるフンボルト大学（Humboldt Universität）の図書館学科（Institut für Bibliotheks- und Wissenschaftliche Information）も含まれていたため、同学科のネストラ教授（Dr, Jürgen Freytag）、同教官グレグーレッツ氏（Dr Alexander Greguletz）から学科の現状についていろいろ話を聞くことができた。

た。このうちネストラー教授はフリードリッヒ・アドルフ・エーベルトに関する学位論文を書いて、広くこの名を知られている人であるが私が訪問した1週間前に定年退職したとのことであった。

私が図書館史に興味を持っていることを知って特に関心を深めてくれたのはグレッグレッツ氏である。氏は1972年に同学科の教官となり同学科教官マルクス氏 (Dr, Erwin Marks) と共に、旧東独の中でドイツ公共図書館史の業績を数多く発表している中堅研究者である。私が氏の博士論文を読んだ、と言ったことも関係してか、帰り際に「また会って話がしたい」と言ってくれた。そこで7月20日に再訪問することを約束して別れた。

約束の日はちょうど学年度末の卒業試験の日にあたり氏は丸1日多忙であったが私のために1時間とって図書館史研究や図書館学教育についての飾りのない意見を述べてくれた。いくらか参考になるところもあろうかと思われるのでその要点をご報告したい。

まず図書館史研究において「激変」(Umschwung) までの東独では2つの重要なポイントが指摘される。まず第一に歴史的眞実 (Historische Wahrheit) である。これについて氏は立ち言った説明はしなかったが要するに歴史研究の中には多くの眞実があった、つまりこれまでの図書館史研究は基本的にまちがっていなかった、という意味であろう。

第二に歴史研究に対する政治的圧力 (Politischer Druck) あげられねばならない。「本当にバカバカしい話なのだが」と前置きして氏はこのような話をしてくれた。

4～5年前のこと、西独の図書館史研究の動向について論文を書いた。すべての学問分野においてそうであったのだが、東独では研究業績を発表するときは事前に許可を得なければならない。そこで氏も同論文の原稿を当局に提示して許可を求めた。ところが西独、つまり「ドイツ連邦共和国」の略称として東独で通常使われている「BRD」のかわりに「BR Deutschland」と書いていたために許可が得られなかった。東独でBRD というときそこには軽蔑の意味がこめられていたそうで氏はそれを考慮してやや丁寧にはBR Deutschlandと書いたのだが、これがいけなかったのである。

この2点を私なりに整理すると東独では図書館史の研究は自由に行なうこと

ができたが研究成果の発表は厳しい政治的規制が加えられていた、ということになる。「激動」以降は自分の信ずるところに従って論文を書きそのまま発表出来るのでこんな嬉しいことはないとも話していた。氏は壁崩壊を心から喜んだ人達の一人なのである。

出版規制に言及すれば学会話は外国旅行の規制に及ぶ。1988年に氏は西独ヴォルフエンビュテル図書館の館長ラーベ氏 (Dr, Paul Raabe) から同館で開催される図書館史研究会への招待状を受け取った。早速西独への研究出張の申請をおこなったが、列車が発車する時刻の4時間前まで何の解答も得られなかった。「病気だと言ってヴォルフエンビュッテルの方を謝ったほうがいい」と助言してくれた同僚もあった。結局ギリギリになって許可が出たようであったが氏にはこれがよほどこたえたらしい。

ところが「激変」後の1990年12月今度はアメリカ情報局 (United States Infomation Service=USIS) から、6週間アメリカ図書館視察旅行への招待を受けた。「はじめて世界に出ることができた」と喜色満面であった。この視察旅行の報告書はドイツ図書館研究所から刊行されたという。この話をきいて私は終戦後、日本の図書館員たちが相次いでアメリカ視察旅行にでかけたことを思い出した。

図書館史の領域でグレグーレッツ氏が今後どのような研究計画を立てているかを訪ねることが今回の訪問の主目的のひとつであった。しかしこの質問に対する解答はいたって簡単であった。氏にとって図書館史研究は図書館学研究の1本の足であるにすぎない。自分は今その他に外国の図書館制度、比較図書館学さらにはニュー・メディアなどを研究しなければならないと考えている、というのである。研究と発表の自由を得て、従来にもまして図書館史の研究を進め、論文を発表していきたいという解答を予想していた私は少しはぐらかされたような気がした。更には、史的唯物論的図書館史研究を再検討したい、という答えも得られそうに思っていたがむろんそれもダメであった。アメリカの図書館視察によって先進国アメリカの図書館制度に開眼し、最先端をゆくニューメディアに接して関心の的がずれてしまったというのであろうか。あるいは史的唯物論的図書館史研究に限界を感じ、むしろそこから離れたいというのであろうか。

自分でも少しくどいなと思ったが「あなたは外国図書館制度やニュー・メディア論を研究しなければならない (müssen) のか、研究したい (müchten) のか」と重ねて尋ねてみた。氏は「ねばならない (müss) だ」と答えた。つまり図書館史は図書館学の中のひとつの小さな領域にすぎない、これだけやっているのではドイツの図書館学教育の中で生き残れない、というのである。それなら日本と同じだ、ということで大笑いになった。

しかし実はこれはわらってすまされる問題ではない。統一後のベルリン市(州)は、フンボルト大学とベルリン自由大学という、東西ベルリンの二大学をかかえこむことになり、その対策に苦慮している。両大学とも内容上は非常によく似た総合大学であり共通要素も数多くもっている。これらを現状通り並行して維持することは、誰が考えても意味がない。西大学を統合しないまでも何らかの調整が必要である。その結果は、グレグーレッツ氏の見方によれば、当然フンボルト大学の縮小とならざるをえない。その動きは既に現実となって現われ始めている。

フンボルト大学の図書館学科には、現在26名の教官がいるがこの秋には大幅な人員削減が行なわれるという。また両大学の図書館学科はベルリンにおける図書館学教官の今後について熱心な論議を重ね、将来的には両学科の統合という展望をもちこんだ意見書を当局に提出したというがその中でも人員の合理化が行なわれる可能性がある。自由大学の図書館学科の教官は国家公務員であるがフンボルト大学の教官は「国家」がなくなったから国家公務員ではなくなった。こうした状況で統合されたら明らかにフンボルト大学側の犠牲が大きくなるであろう。グレグーレッツ氏に限らずフンボルト大学の教官は自ら生き残りをはかるために、大学あるいはベルリン市当局が必要と考える分野を研究し教えなければならないのである。

これは大学における教官と研究に対する新たな統制でなくて何であろう、という言葉が出かかったが私は口をつぐんだ。それは氏のほうがはるかによく知っていることだから。氏によれば「激変」後に、思想的な理由から大学を去った人もあり、また今後思想的な理由で解雇される人もありうる、とのことである。事態はかなりドラスティックである。

私は更にフンボルト大学の今後についての氏の考えを訊いてみた。氏は若手

教官たちの活躍が期待される、大学の改革はゆるやかにしかし前進するだろう、と答えた。私が「この改革はゆっくり進めたほうがいいと思う」とのべると「急ぐとまたバカなことをしでかす」と笑った。

統一後の旧東独地区には旧共産党とほとんど同じ内容の綱領をかかげる政党があり、先のベルリン区会議員選挙でも旧東ベルリン地区では一定の支持を受けた。こうした社会主義運動に対しても、グレグーレッツ氏はかなり悲観的である。

自分も20年前は、彼等と同じ考え方でかなり積極的に活動した。しかしその結果は今見るような状態である。今後同じ路線で進めたとしても、これからよりよいものが生れる可能性はない。これまで40年間やって何も得られなかったのではないか。もし20年前にもどれるものなら、自分は当時とは違った考え方をし行動をするであろう。こういうことを考えながら、今自分は若い人達にアドバイスしている。これ以上社会主義の経験を重ねる必要はない。「Mir-reicht aus」(私には十分足りた)。

私自身は社会主義は大きな歴史的実験であった。理論は正しいかにみえたが現実には理論通りに進まなかった。理論のどこかに重大な間違いがあったのであろう。これからどこに間違いがあったのかを研究する必要がある、それが旧社会主義圏の人達の課題である、という私見を持っている。しかしグレグーレッツ氏の上述の話聞いた後ではこうした自分の考えが薄っぺらなものに見えて仕方がなかった。自ら40年間苦悩の体験をした人達に向かって何一つ自分で体験したこともないものが一体何をいえるであろうか。

氏が、いささかの懸念もなく従来の東独の図書館史研究をしっかりと再吟味し歴史の真実をもとめて本格的に図書館史研究に取組み次々と業績を発表できる日の1日も早からんことを願ってやまない。

*

*

*

編集部・・・ドイツ留学中の河井弘志先生(立教大学)より投稿がありました。本文には注が付けられておりますが、分量が多いため割愛させて頂きました(著者承諾済)。

【報告 — 第10回図書館史を考えるセミナーについて】

「変革期の図書館協会 — 日本図書館協会創立百年に因んで」をテーマとして、第10回図書館史を考えるセミナーが、昨年9月5-6日、アジア会館（東京）を会場として開催された。

報告者とテーマは次のとおりである。

（9月5日）

山本順一	アメリカ図書館協会
岩沢 聡	ソ連の図書館と図書館協会
林 昌夫	韓国図書館協会

（9月6日）

石井 敦	アノ協会といわないで、オレの協会といってくれ — JLA 100年の歩み概説 —
池田政弘	神奈川県図書館協会について

山本報告では、理想的に描かれがちなALA像に対し、必ずしもそうではない「裏面史」が詳細に報告された。岩沢報告では、民間団体としての図書館協会が存在しなかった旧ソ連において、ペレストロイカ以降協会設立の動きが起こってくる経過が報告された。林報告では、日本の植民地支配から解放された朝鮮において、いち早く図書館協会設立が起こってくる過程と、その担い手たちの動きが報告された。石井報告では、JLA百年史の編集に携わりつつ氏が感じてきた、現代の協会が果たすべき役割について報告された。池田報告では、地方図書館協会の中で、公立図書館のみではなく大学図書館をも含む協会として、独自の発展を遂げてきた神奈川県図書館協会の歩みが報告された。

参加者は述べ22名であった。

【事務局通信】

〈会員制度の改正と会費値上げのお願い〉

92.12.20の運営委員会において、1993年度より、現行の会員制度（A、B会員）を改正し、あわせて会費を値上げすることに決定致しました（下表参照）。会員の皆様のご理解をお願い致します。とりわけB会員の皆様には今後

とも研究会の維持発展にご助力下さいますようお願い致します。

	現 行	改 正 点
会員制度	A 会員・・・『図書館史 研究』の配布を受ける会員 B 会員・・・『ニュース・レター』のみの配布を受ける会員	① A・B 会員の種別をなくし一本化する。 ② 会員は全て機関誌『図書館史研究』と『ニュース・レター』の配布を受ける。
会 費	A 会員 2, 0 0 0 B 会員 1, 0 0 0	3, 0 0 0

〈改正理由〉

1. 会員制度の改正について

現行の会員・会費制度は機関誌『図書館史研究』の安定的な発行を実現するために、それまでの会員・会費制度を改正し、会員・会費を、『図書館史研究』の配布を受ける（A 会員 2,000円）と、配布を受けない（B 会員 1,000円）の2種類に分けた（1991年度より実施）。

『図書館史研究』は我が国唯一の図書館史専門の研究誌として重要な位置をもっている。日外アソシエーツ社の理解と協力の下に現在までに8号発行されているが、今後とも継続的安定的に発行し、その内容をさらに充実してゆくためには、研究会として最低限 100部以上の確保が必要である（特に日外アソシエーツ社との協力関係を今後とも維持するために）。これまでのところA会員数は、91年度 100人、92年度 110人と何とか最低限度を確保している状況であり、研究会としても今後一層会員の拡大に努める必要があると考えている。そこでこの一環として、A 会員 B 会員の区別をなくし、会員全員に『図書館史研究』の購読をお願いしようということになった（92年度 A・B 会員 134 名）。

2. 会費値上げについて

『図書館史研究』は上でふれたように、日外アソシエーツ社の協力の下に発

行されているが、現在研究会において100部以上確保することを条件として、1部1000円で卸してもらっている。しかしながら現行会費決定の際、『図書館史研究』の郵送費(210円)を組込まずに会費を設定したため、郵送費は研究会会計より持出すかたちとなっており、財政圧迫の大きな原因となっている。

さらに、現在『図書館史研究』の版下作成にかかわる経費は、日外アソシエーツ社の出血奉仕に依存しているのが実情である。しかし出版事情の悪化等、諸般の事情により、今後版下作成を研究会において行なう必要が生じている。そのための経費負担が最低限10万円以上見込まれる。これを会員割りにすると(会員数130人として)770円となる。これに郵送料210円を加え、合計980円の値上げが今後必要となる。

以上の現状より、現行(A会員:2,000、B会員:1,000)を3,000円とすることが必要であるとの結論に達した。

【研究情報】

92年度日本図書館学会の学会賞:川崎良孝会員が『アメリカ公立図書館成立史の研究』で受賞(92.9)。

92年度日本図書館研究会の図書館研究奨励賞:小黑浩司会員が論文「衛藤利夫、— 植民地図書館人の軌跡」で受賞(93.3)。

【会員動向】

退 会

~~~~~ 訃報 森耕一会員 ~~~~~

森耕一会員は昨年11月5日逝去されました。享年69才。

森会員は本会運営委員、第1回図書館史セミナーでの報告者などをつとめられるなど、研究会発展に大きな努力を傾けられました。お冥福を祈ります。

なお、『図書館史研究』9号に会員の追悼文が掲載される予定です。

~~~~~


第 1 1 回 図書館史セミナーご案内

1993年度は下記の要領で第11回「図書館史を考えるセミナー」（緑陰セミナー）を開催しますので、是非ご参加下さい。

記

日 時：1993年 8月28日（土）から 8月29日（日）まで

第一日目は午後 2 時ころから

第二日目は午後 3 時ころまで

第一日目は終了後に懇親会を行います

会 場：椋山女学園大学（図書館、あるいは短大棟）

名古屋市千種区（JR名古屋駅から地下鉄で20分）

参加費：7,000 円（懇親会費込み）

申込日：1993年 6月30日まで（厳守）

申込先：

川崎良孝



その他：① 今回は緑陰セミナーです。参加者全員が各自数十分間、現在の自分の研究を報告します。

② 2日目の午後は総括討議にあてます。

③ 宿泊は各自で手配してください。

④ 申し込み人数が確定した時点で、申し込み者にたいして詳しい日程（各発表者の持ち時間、参加者名、発表題目など）、および会場までの地図その他を送付します。